



Title	農民美術運動における構成
Author(s)	石川, 義宗
Citation	デザイン理論. 2020, 75, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

農民美術運動における構成

石川 義宗 長野大学

はじめに

本論は大正時代の地方の農村にて「構成」の概念が受容され、現地の地場産業において応用美術が芽吹いたことを紹介するものである。

版画家として知られる山本鼎（1882-1946）は、長野県上田市（旧神川村）において二つの運動を起こした。一つは「児童自由画」であり、もう一つは「農民美術」である。前者は、当時の模写重視の臨画に反対した自由主義的な絵画教育であり、後者は、農閑期を利用した工芸品の地場産業である。東京で自由学園を創立した羽仁もと子（1873-1957）とその夫である吉一（1880-1955）は、創立初年（1921）から、山本を美術科主任として招聘し、新たな美術教育を模索していた。山本は「美術の時間」を設け、絵画も工芸も自然をモチーフにするという方針を持っていたが、この際に教科書として刊行された書籍が『マダムシユネエの指導法による模様構成の学習』（1928、以下『模様構成の学習』）である。副題に「児童教育用デテール指導書」とあるように、美術教育を念頭に編纂されたものであり、文中には自由学園における教育の様子も記されている。

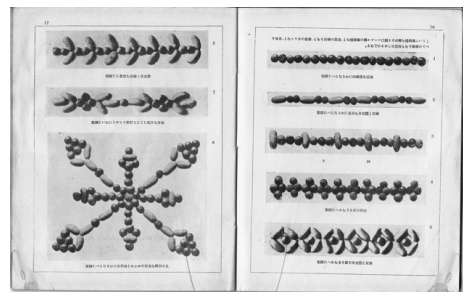
目的と手法

先行研究において自由学園の教育と農民美術の関連を指摘するものが散見され、また、『模様構成の学習』を刊行したのは農民美術の出版部であったことから、本論は同著が自由学園だけではなく、農民美術の意匠にも応用されていたことを検討する。そのために、同著の内容、および、農民美術

の製品と農民たちが残した文章に注目する。

「構成」の概念

『模様構成の学習』の内容は「緒言」「マダムシユネエの指導法」「実習の要領」「図案私論」から成る 45 頁の書籍である（下図）。



もともとパリの幼稚園長による児童向け書籍であり、それを山本は翻訳し、私論を加えた。先述したように、このころ山本は自由学園で教鞭をとっており、同著は美術教育用の教科書として編纂されたと考えられる。しかし、その私論は児童教育についてのそれではなく、もっぱら山本の意匠論になっている。それは次のようなものである。

従来絵画の創作及鑑賞は、概ね詩的立場から行はれ、構図、写形、色彩、濃淡、筆致等、すべて描写の仕事のなかに発達した、處がそれぞれの絵画的効果と全然立場を異にした絵画的価値が厳存するのである。それは何かと云ふに、即ち画面の構成其事で、私は是を数的価値と称して居る。

(旧字体及び踊り字を常用漢字及び平仮名にした。以下の引用も同様にする。)

冒頭で、山本の考える意匠の概念が従来の絵画的な要素とは異質であることが示されている。実は『模様構成の学習』刊行と同じ年、山本は雑誌『学校美術』「血気の仕事」(1928)において児童自由画の運動を終えることを宣言している。したがって、『模様構成の学習』におけるこの私論は、山本が「詩的立場」から「数的価値」に転向する決意の表明ともなっているのである。この「数的価値」について、山本は次のように述べている。

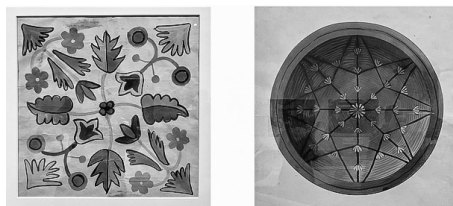
図案の学習は、(略)畢竟、数的審美力を啓発する事であり、構成の技能を養成する事である。そこで私は図案の学習を手工科に附属させるがよいと思ふ

『模様構成の学習』において構成の概念は「図案」や「数的審美力」といった意匠論の中にあり、それらは工芸の領域に置かれている。実際、1922年時点での自由学園の「美術の時間」は「絵画」「工芸」「鑑賞批評」から成っていたが、「意匠図案」は「工芸」の内容である。しかし、その後、この構想に変化が現れる。山本は『児童と図画』(1924)において再びカリキュラムを示し、「絵画」を「素描」と「色彩」から成るものとし、「色彩」を「写實的」「構成的」と分けた。すなわち、構成の概念は工芸と絵画を貫くものになっている。当時は霜田静志(1890-1973、教育学者)らによる「図画手工合一論」があったものの、基本的に日本の美術教育は昭和に至るまで図画と手工を別の教科として発展させた。山本の構成の概念は当時としても先進的な試みだったと言える。

農民美術における創意の応用美術的な変化

このような構成の概念は、農民美術の動きと連動している。農民美術の製品には明瞭な対称性を

持った意匠が見られる。これらには意匠図があり(下図)、『模様構成の学習』のような構成が反映していることがうかがえる。



意匠図案について染織を担当していた村民の一人、三枝古都は次のように述べている。

ほんの赤ん坊である自分の知識や経験や、技倆に拘泥せずに、却って無知なるものの大膽さだ。少しずつ試作にとりかかつてみた。今はなるべく容易な方法で、ただ意匠図案や、緯糸の種類やとり合わせで効果を出すことから始めて居る。

この言葉には、三枝が自らの創意を放縦に発展させるのではなく、意匠図案に沿って糸の組み合わせを何通りも試す様子がうかがえる。本論はこの様子を「創意の応用美術的な変化」と呼びたい。構成の概念はこのように農民たちに受容されたのではないだろうか。

おわりに

山本が「数的審美力」として定義した「構成」は、自由学園においては絵画と工芸を貫く児童教育の根幹であった。しかし、旧神川村においては、意匠図案に沿って組み合わせを試すような創意の応用美術的な変化を生んだ。この思考こそ美術の教養のなかった農民たちに、ごく短期間のうちに美術運動を可能にしたのではないだろうか。